

第2講：127「東京々々、長崎」

おやさと研究所教授
金子 昭 Akira Kaneko

教祖による「暗示」

『稿本天理教教祖伝逸話篇』（以下『逸話篇』）第127話「東京々々、長崎」の逸話の元になっているのは、昭和37年に刊行された『天理教東大教会史』第1巻にある「赤衣とお言葉を頂く」と題した文章である。この文章は『逸話篇』127とほぼ同じ内容であるが、「思うにこのお言葉は、どうせい、こうせいのおさしずでもなく又御命令でもない。ただ初代会長〔上原佐助〕の行くてを指し示された暗示のお言葉であった」と、教祖のお言葉の説明が付記されている。

当時、上原佐助は大阪で「備佐」という畳表商をしていた。ところが、明治12年の夏頃から畳表の価格が急落し、商売が次第に傾いていった。そんな中、明治13年にふとしたことからお道に関心を持つようになった。翌明治14年には、伯父佐吉夫婦らと共に初めておぢばに帰り、教祖にもお目通りを果たすことができた。教祖は盃にお神酒を入れて、「さあ、お上がり」と佐助たちに勧められ、また上原佐助と「力くらべ」をされている（『逸話篇』第81話「さあお上がり」参照）。その後「備佐」の経営は悪化する一方で、明治16年頃には、商売は厳しい状況に立ち至っていた。もしかしたら、佐助はこの苦境を何とか助けてもらいたいという思いで、おぢばに帰ったのかもしれない。教祖から「東京々々、長崎」という御言葉を頂いたのは、ちょうどそんな切羽詰まった時期だったのである。

上原佐助はまもなく商売をすべてたたんで、明治18年7月、36歳の時に東京に出ることになった。そこから彼の東京布教が始まる。明治16年、「東京々々、長崎」というお言葉を頂いてから2年近く経過しており、佐助が実際に東京に布教に行くまでには、一大決心があったと想像される。このお言葉はあくまで場所の暗示であって、東京あるいは長崎に布教に行くようにという指図ではなかった。佐助は、このお言葉についてきつと色々と思いを巡らせていたはずである。

「東京々々、長崎」の意味

教祖の「東京々々、長崎」というお言葉に対して、上原佐助は「東京」を選んだ。このことについて考えてみたい。このお言葉には二つの理解が可能である。

一つは、2回繰り返される「東京」の力点に置く理解である。明治以降の東京は文字通り、政治・経済・文化の中心となった。そして、ちょうど江戸時代の長崎が、鎖国していた日本の唯一の西洋との窓口だったように、東京はまさに世界とつながる窓口となった。東京こそ、国内・海外のあらゆる情報が集積する都市である。だから、「東京か、長崎か、どちらか」ではなく、「何より東京であって、東京というのはかつての長崎にあたる」というのが、このお言葉の意味になってくる。教祖は上原佐助に対して、名実ともに日本の中心となった東京にこそ行くようにと、暗示されたのである。

もう一つは、その後の上原佐助の身の上にひきつけた理解の仕方である。ここでも力点は東京にあるが、長崎という名前も生きてくる。東京に出た佐助は数多くの講社を作ったが、最初にできたのが吉原講社だった。この吉原講社の熱心な信

者の家に、富永つた（通称つね）という女性が奉公していた。熱心な勧めもあって、佐助はこの女性と結婚したが、その吉原講社の信者一家の屋号が長崎屋だったのである。ちょっと出来過ぎた話のようであるが、これは事実である。つまり、「東京々々、長崎」というお言葉が、教祖の予言として佐助の身の上に実現したのである。ひょっとしたら、教祖は「東京々々、長崎」ではなく、「東京々々、長崎や（屋）」と仰ったのかも知れない。

ただ、二番目の理解の仕方では、お話がここで自己完結して終わってしまい、教学的には物足りないところがある。むしろこの逸話を現代につなげるためには、最初の理解の仕方を膨らませていったほうが良いと思う。教祖は「東京々々、長崎」というお言葉を通じて、天理教の教えが日本の中心へと届き、世界の動きの先端と関わりながら展開していくことを願っていたのではないだろうか。

「東京々々、長崎」の現代的な受け止め方

21世紀の現代は、グローバルな情報社会である。東京に行かなくても、いまやスマートフォン1台あればそこそこ情報を得ることができる。またSNSを活用すれば、世界中どこにいても、自分のほうから情報を発信することができる。そんな時、「東京々々、長崎」の逸話はどうのように受け取ったらよいのだろうか。

上原佐助は東大教会の初代会長を務めたが、晩年は本部員としておぢばで過ごした。おぢばにいても、会長職を務めていたので、東京には何度も出張していた。教務などの連絡には、手紙で済む時もあえて電報を打っていた。電報を打つ回数があまりに多かったので、佐助は当時の丹波市郵便電信局から「電報^{はかせ}博士」というあだ名をもらうほどであった。

電報というのは、現代で言えばEメールとかLINEに当たるだろう。佐助はいち早く当時の最先端の情報技術を駆使して、おぢばから理を流していた。東京や長崎はそれぞれの時代において、世界の情報のキャッチアップの場所であった。そこに行けば、内外の最先端の情報を入手することができた。

教祖は佐助に対し、「東京々々、長崎」というお言葉でもって、日本における情報の集積地点に行き、親神様の教えを発信してくると願っておられたのではないだろうか。その精神は、情報の最先端に向けて、真実の教え、よろづたすけの道を説いていくことにある。

21世紀の現代、私たちはどこにいても、そこが東京であり、長崎であると言うことができる。また、だれもが東京、長崎にいるようなものである。人々はみな情報に対しては目が肥えているのである。

それゆえ、私たちに求められるのは、単に教えを右から左に流すというのではなく、目の肥えた人々にも真に得心してもらえように、真実の教え、よろづたすけの道を、現代社会の動きにかみ合った形で発信することである。そのような意味で、「東京々々、長崎」のお言葉は、現代の情報社会に対応した形でバージョンアップして理解していくべきではないだろうか。